

就活エージェント・スミス

ムーチョヨ・マイケル

【I】

「留守電メッセージを再生します」

マイケル様。おはようございます！ わたくし、就活エージェントをしております、スミスと申します。

今回ご連絡させていただいたのは、他ならぬマイケル様の大事な、それはそれは大事な将来に関わる件についてお話したためでございます。現在マイケル様は就職活動が続けておられるようですね。ぜひわたくしにお手伝いさせてください。絶対に後悔はさせません！ 〴〵興味がおありでしたら、ぜひこの番号へ折り返しご連絡ください！ それでは、失礼いたし——

なんだこいつ。気持ち悪い声してるな！ 日本車の中古車営業マンみたいにハキハキ、明るくへりくだった喋り方してやがる。うるせー。俺様マイケルはすごいんだぜ。喋りもうまいしゲームもうまい。学校での成績は毎回トップレベルさ。そろそろ学校が終わるらしいんで、就職活動とやらを始めてる。結果はどうかというところ……まあ他のやつらよりは少し遅れてるぐらいだ。でも大丈夫

夫。卒業までにはなんとかなるさ。とりあえず今日はなんにもせず、APHEXでもしよう。ザ・グレート・ト・プーも言っていたぜ。「ぼくは毎日『なにもしない』をしているよ」と。

【II】

「オンライン PPS ゲーム「APHEX」が社会問題化 — 中毒性の高さが原因か —」2077 Jun. 16th ジュリアス・ジョーダン

「APHEX」は、神経系に専用のチューブを直接接続してプレイするVRゲームだ。ゲーム内容は、同時接続された全世界のプレイヤーがフィールド内のどこかにいる『エイ・フェックス兄弟』を探し出し、抹殺するというものだ。ただし、マッチ間にエイ・フェックス兄弟は一組しか出現しない。おまけに、その性別や服装、人種や身体的特徴が毎ゲーム変わるといふのだ。そのため、プレイヤー間で協力して動くこともなきにしもあらずだが、互いが互いを「エイ・フェックスなのではないか」と疑うという疑心暗鬼が常に生じてくる。

間違った相手を殺してしまえば24時間のあいだ試合に参加できなくなる。ペナルティがあるが、運良く本物の

エイ・フェックスを倒した場合はいわゆる「気持ちのいいビリビリ」が体験できるというシステムだ。

【広告】

史上最高の戦争体験！君は耐えられるか！？第三十次イラク戦争を忠実に再現したフィールドで、ブラックスター二等兵の過酷な従軍メモリを追体験しよう！

「爆薬でできたチョコレート Part II」予約申込絶賛受付中！

問題となっているのはこの「ビリビリ」の正体である。専門家の中には危険薬物「ゼロトニン」を摂取したときと同じ物質が使われていると指摘するものもあり、警察当局もその正体に目を光らせている。だが、開発元のノーティ・デューズはこの「ビリビリ」の正体についてはノーコメントを貰っている。

「このゲームは非常に危険です。一度『ビリビリ』の沼にハマってしまえば、抜け出すのは至難の業です。この悪名高い娯楽により、数多くの有望な若者が廃人と化しています」社会セラピストのアンドー氏は危機感をあらわにしている――

▲「おい、お前！エイ・フェックスだな！？」

▽「ちげーよ！お前こそどうなんだよ！」

▲「は？生意気だぞXx_IloveTerrorism_XX。リーダーに楯突くやつはこうだー」

● [Xx_IloveTerrorism_XXがNoobMaster1984_XXXにメッタ刺しにされた]

● [NoobMaster1984_XXXがエモート『地獄に堕ちろ！』を実行した]

● [Xx_IloveTerrorism_XXはエイ・フェックスではない！NoobMaster1984_XXXは24時間ゲームサーバーからBANされます]

ああ最悪だ！せつかくゲームチャンピオンになれそうだったのに、この期に及んで仲間割れか！仕方ねえ、あいつの装備は武器も防具もレジェンダリーだし、こっちから攻撃しても勝てそうにない。ここは逃げよう！あそこに丁度いい小屋があるな。

こうしてマイケル様は薄暗い小屋の中に逃げ込んだわけだが、そこには先客がいた。そいつのアバターは金髪オールバックにサングラスをつけ、洒落たスーツを着

込んだでかい男のものだった。俺はとりあえず敵意がないことを奴に伝えた。

● 『Mucho-Michael-Number-One がエモート『ハロー』を実行した』

▲● おはようございますスミス様。ここで会えるのは奇遇ですね！

「ワワーツ！」

突然あの電話の音が頭の中に直接語りかけてきやがった！ 全身に悪寒が走った。普通はボイスチャットかなんかで音質の悪い声が聞こえてくるはずだ。なんせオンラインゲームだし。だが今は明らかに違う。これって、「脳内に直接語りかけてきてる」ツてコト……!?!? 突然の出来事にびっくりした俺は、10万クレジット以上もガチャに費やしてゲットした、とっておきの武器をそいつにぶっ放した。

● 『?A?en?i?Sm?h?が Mucho-Michael-Number-One にバ?バ?され?』

だがそいつはいつものプレイヤーのようにすぐ消えることはなかった。ヘッドショットを狙ったんだが、そい

つの右の眼球から頭頂部にかけて部分がドロドロに溶けただけだった。

「何なんだよ！ クソツ！」

そいつはまだハッキリと語りかけてくる。

「マイケル様。それは困りますね。仕方ない。現実の世界でお話を続けましょう。」

奴は突然消えた。

● 『?A?en?i?Sm?h?はエイ・フェックスだ!』

● 『おめでとろ！ Mucho-Michael-Number-One には報酬が与えられる!』

【Ⅲ】

ここは天国。海を泳ぐ飛行機や、ビキニを着た美女の群れが三角定規のてっぺんでカエルの王とダンスを踊っている。空には時計塔が群れを成し、猫の手は太陽を支えている。茶髪ボブの四人組が飛行機から降りてくるや否や、星屑と化した赤髪の宇宙人が自分の体の中に飛び込んできた。

「ああ、それは駄目だ！ 待て！ やめてくれ！ もう持たない！ やめろー！」

マイケル！

マイケル君！

兄ちゃん！ どうしたの？ 目を覚ましてよ！ 兄ちゃん！

はっ！

気がつく俺は病室にいた。病室の天井を背景にして、俺を覗き込んでくる、お婆のカヨコ、医者らしき人物、年下いこのレッサーマイケルの顔が見える。

「なんだ？ 俺は一体なにを……クソツ、記憶があやふやだ」

「ムーチョのあんちゃん！ よかった！ 死んだかと思つてヒヤヒヤしたよ！」

「どういふことだ？ 俺はゲームをしてたはずだが……」

「そう。あんたね、なんだかわけのわからない機械をかぶって寝ていたかと思うと突然『女だ！ 時計だ！ スタードラストだ！』だのなんだのわけのわからないことを叫び出して、急に痙攣したんだよ。お婆ちゃんそれはそれはもうびっくりして、救護チームを呼んだのさ。お金あとで払って頂戴ね」

「そう。それであんちゃんは今までぐっすりだったんだよ！」

「そうなのか……わけがわからんがとりあえずありがとう」

「あんたの命があつて本当によかったよ。そういえば、就活は大丈夫なのかい？」

就活、就活……はっ！ そういえば！

「おいお婆ちゃん、俺が意識を失ってからどのくらい経つたんだ！」

「さあどのくらいかねえ……」

「今日、あんちゃんの APHEX の週間ログインボーナスがちょうど切れてたから、一週間ぐらいだと思つよう！」

「まずい！」

「まずいまずいまずい。慌てて俺は病室を飛び出した。」

「おいどこへ行くんだね！ まだ安静にしていないう駄目だ！」

医者が俺を止めにかかった。

「俺を止めないでくれ！今日は第一志望の最終面接が入っているんだよ！クソッ！」

焦りと緊張と絶望が一気に頭の中を駆け巡る。俺は病院の廊下をひたすら走り出口を目指した。

「患者を捕まえろー！」

看護師や警備員、医師が総出でマイケル様を追いかけてくる。俺を止めてくれるな。お願いだから止めないでくれ。今日こそ運命の日なんだ。だがもう終わりだ。

「無駄な抵抗はやめるんだな」

前からスタンガンをこちらに向けた職員集団がやってきた。後ろからも囲まれ、完全に行く手は塞がれた。

「なぜだ？病院職員のくせに、やけに連携が取れてやがる！もしかして貴様らはプロの APHEX プレイヤーなのか？」

「まあ、そうとも言えるな。」

白衣のコートを身を包んだ院長らしき人物が、前方の人混みのなかから歩み出てきた。かなり図体がでかい。だがなにやら様子がおかしい。目が青く光ってるじゃないか。まるで八十年以上前くらいのターミネーターちゃらって映画にでてくるサイボーグだ。

すると突然、電話がかかってきた。電話番号から察しがつくが、俺の第一志望だ。

「出たまえ」

院長はあるうことかこのマイケル様に命令した。なんなんだこいつは。気に食わないが第一志望からの連絡を無視するわけにはいかないので、電話に出ることにした。

「はい。マイケル・ムーチョ・マイケルです」

「いつもお世話になっております。わたくし、アラサカ社人事部採用担当のタケムラと申します」

「あっ！タケムラさん！申し訳ございません。ただいま大急ぎでこちらに向かつております！遅刻は絶対にいたしま」

「遅い。貴様は失格だ。日本語のことわざで『石の上にも三年』とあるが、我々アラサカ社は非常に時間に厳しいのでね。『三年』どころか『三秒』すら惜しいのだよ。君が今時点でどれだけ遅れているか想像がつくか？恐ろしくて言葉にもしたくないな。残念だが君の選考は終わりだ。貴様にはお祈りする価値すらもない。せいぜい社地の地下で骨となり、犬に喰われるがいい」

電話が切れた。

絶望だ。今までトントン拍子に選考が進んできた。インターンシップにも長く参加して、担当のお姉さんから高評価をいただいていた。アラサカ社といえば世界一の企業だ。世界中の軍事兵器ビジネスを牛耳ってる。就

職先としての安定度はピカイチだ。それに、社員の平均年収も世界トップだ。「アラサカ」の名を出せばどんな相手でもイチコロだ。モテモテだ。俺はそんな人生を歩むはずで、それを見込んでわざわざおぼから借金してロールスなんちゃら買って車も買ったんだぜ……。

ああ。俺はなんてゴミなんだ。思えば今までゴミみたいな人生を送ってきた。母親は俺を産んだ瞬間にカー・コバーンみたいに自殺したし、ガキの頃、今は出ていった父親に鼻をぶんなぐられて顔は曲がるし、APEX世界ランキングではいまだに千位だし、おまけに就活には失敗するし。はあ、俺なんて生まれてこなければよかったな。死んでしまおうかな。

「お気の毒に。マイケル様」
眼の青い院長は、まるで俺のすべてを見透かしているかのような、優しい顔をしてこちらの目を覗き込んできた。

「あなたは素晴らしい。あまりに素晴らしすぎて、世界一の大企業ですらあなたの魅力に気付けません。この醜い世界は、あなたに追いつけていないのです」
院長はさらに続けた。

「あなたは時代が追いつけない流れ星。その流れ星の瞬間の煌きであるスターダスト。そう。あなたはスターダストなのです」

訳がわからない。だがものすごく心地の良い気分だ。人生で初めてだ。こんなに自分を肯定してくれる言葉は。この院長が何者なのか全くわからない。だが、俺のことを深く理解してくれている。それだけは確実だ。俺は久々に安心感と信頼と、そして大きな物に包まれるような心地よさを感じた。

すると院長は突然、満面の笑みになり、キーを上げた声で語りかけてきた。

「申し遅れました。わたくし、先日ご連絡させていたただいたエージェント・スミスと申します！絶対に後悔はさせません！ご興味がおありでしたら、ぜひ折り返しご連絡ください！それでは、失礼いたします」

謎のセリフを言い終えると、院長は突然苦しみ出し、俺の胸に倒れ込んだ。他の職員全員も突然うめきだし、やがて全員死んだ。なぜだかわからないが、全員頭から火花を散らせていた。

『就活』、そろそろちゃんとやろうかな」

俺はひとりごち、着信履歴からスミスに電話をかけた。

【IV】

「留守電メッセージを再生します」

マイケル。いい加減返事をしてくれ。お前が就職活動に悩んでいることはみんな知ってる。だがな、いくらなんでも連絡先を全部断って、突然いなくなるなんて、それはさすがにないだろ！ 仕方がないからお前の古い連絡先にかけてるんだが、お前に届くことを祈ってるぜ。

ほら、いつものように週末に女と酒をたんまり用意したストレス解消パーティーやるからさ。あとあんまり大声では言えないが、「アレ」もあるぜ。あれだよ。お前の好きな「ゼロトニン」ってやつ。お前もこいよ。なんだっけ、おまえの大好きなゲームとか、あとナンシーにジエニー、ブライアンなんかも用意するぜ。な？ あんまりふさぎ込むのもよくないぜ。パーツとやろうぜ。パーツと。

……正直いうと、俺も困ってるんだよな。なかなか俺のことわかってくれる会社がいなくてよお。でもな、最近すごそうなおエージェントから連絡が来たんだ。そいつはまるでお前みたいだったな。……なあ、頼むから折

り返し連絡くれ。頼むよ。俺が久々に連絡したこと、後悔させてくれるなよ。